ムツシの呼称とその意味

——白山麓の焼畑用地の民俗的考察その1——

橘　　礼吉　石川県立歴史博物館

THE NAME OF "MUTSUSHI" AND ITS MEANING —— ON THE STUDY OF FOLKLORES ABOUT FALLOW LANDS FOR YAKIHATA IN THE MT. HAKUSAN AREA——

Reikichi TACHIBANA, *Ishikawa Prefectural Museum of History*

ま え が き

手取川上流，石川県白峰村・尾口村等を中心とした白山麓は，かつては焼畑依存度の高い地域として学術的に注目を集めてきた。白山麓の焼畑の現状は，消滅期の終末ともいうべき時期に到来しており，大根・蕪を最優先に栽培する焼畑が細々と経営されている実情である。

従来の焼畑に関しての保存策や調査研究は，「もの」すなわち有形資料にもとづく方法が中心であった。例えば保存策では，焼畑民具や出作り小屋の保存であり，研究では印刷物の農業センサス報告書から焼畑面積・焼畑農家率の算出と分析，焼畑用地の貸借文書にみる地名や貸借慣行の検討等である。そしてこれらの研究実績は，それなりに多大な成果があった。

その反面，「もの」を伴わない無形資料に基づく研究は，稀薄であったことは否定できない面がある。

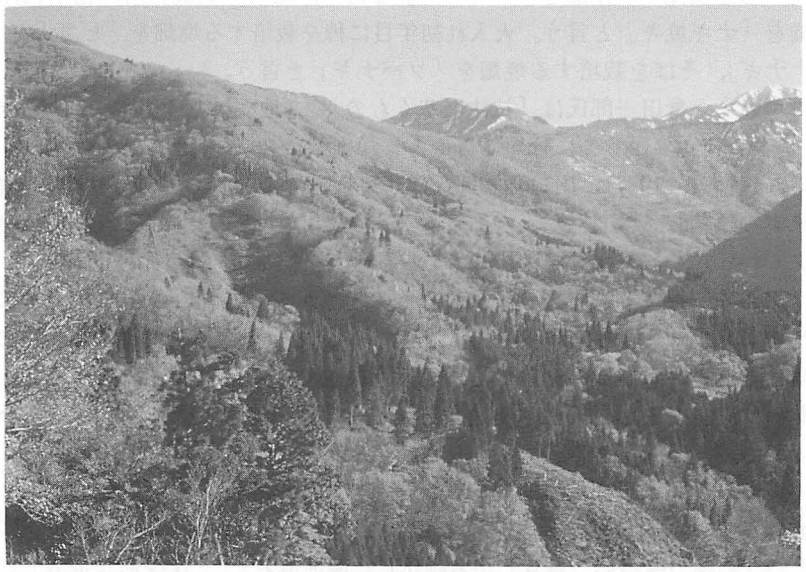


写真1　白峰村河内谷苛原のムツシ
近世末より，ムツシの一部に杉を植林する慣行が起る．杉植林地がムツシ．ムツシは，左上より右下への長い斜面の下半部にひろがるのがわかる．斜面上半部や奥山は総称してサンリン．

本来焼畑は毎年，木・草を切り倒し火入れをすることから始まるが，例えば「どんな樹林や草地を焼畑用地として選定していたのか」「木を切る時や，着火する際の儀礼はどうしていたのか」等は無形的なもので，「もの」が残らない性格のものである。焼畑体験者の多くは高齢に達しているが，まだ健在な人もいる。焼畑体験者の意識中にある各種の焼畑体験や，焼畑用地の選定基準等は無形的なものである。焼畑用地は，焼畑の消滅で杉植林地にかわり，次第に減少はしているが，まだ現地には存在している。

焼畑は広大な山林原野のどこでも可能なわけではない。焼畑民は，海抜高度・傾斜・土質・斜面の向き・植生分布等の条件を総合判断して，焼畑用地すなわちムツシを選定し，焼畑を営んできた。この研究は，ムツシについて焼畑体験者間に伝承されてきた無形資料を聞き取り，次いで野外調査を行ってムツシ現地を観察して伝承内容を検証し，その結果を記録することにした。

方法論的には，調査対象地域を石川県白峰村・尾口村・旧新丸村（現小松市新丸地区）とし，最初は民俗学的手法の聞き取り調査に重点をおいて無形的伝承を多く採取し，次いで伝承内容を地理学・森林土壌学等の観点をとりいれて検証化をはかり，最終的には焼畑用地ムツシを総合的に理解したいと思う。

ムツシの呼称

1．「ナギハタ」「ナギ」という呼称

手取川の水系は，本流と支流の大日川と尾添川に三分できる。本流の源流を牛首川という。牛首川・大日川・尾添川水系の各村落と出作り群では，焼畑を「ナギハタ」または省略して「ナギ」という。木・草をなぎ倒して焼くから「ナギハタ」とよぶのだという。ナギハタ・ナギの呼称は，白山麓の石川県側ばかりでなく，福井県・岐阜県側にも広く分布し，漢字は一般的に「薙畑」の字を当てている。

焼畑のため草・木を伐採する作業を「ナギ刈り」と言い，建材・薪炭材用の樹木伐採と区別している。火入れ作業を「ナギ焼キ」と言う。火入れ初年目に稗を栽培する焼畑を「ヒエナギ」，大根を栽培する焼畑を「ナナギ」，そばを栽培する焼畑を「ソバナギ」と言う。

焼畑の呼称について，倉田一郎氏は「技法に基くもの」，「地貌に基くもの」，「農作形態に基くもの」，「作物に基くもの」の四っつに分類できるとし，ナギハタ・ナギは「地貌に基く」呼称であると位置付けしている（倉田，1937）。山口弥一郎氏は，焼畑呼称を「焼くと言う意味を含む語彙」，「刈る・切るを意味する語彙」，「切替焼」，「あらき・あらく」，「かの」，「その他の語彙」の五つに分類し，ナギハタ・ナギを「その他の語彙」に属するものと指摘している（山口，1944）。ナギハタ・ナギの呼称は，伐採作業の折草木をなぎ倒す様に，その起源が求められることは前に述べた。したがってナギハタ・ナギの呼称を，倉田氏が「地貌に基くもの」，山口氏が「その他の語彙」に分類・従属させてきたのは誤りである。倉田氏の基準ではむしろ「技法に基くもの」，山口氏の場合は「刈る・切るを意味する語彙」に該当する。二氏の古典的名著は，白山麓の焼畑に言及している部分もあるので，この際指摘しておく。

最近野本寛一氏は，静岡県下の具体的地名を基礎として焼畑呼称を分類した。それによれば焼畑呼称を「火・焼地名」，「輪作地名」，「伐採形状地名」，「循環表示地名」，「その他」に分類し，ナギとは「薙ぐ」という動詞の連用形「薙ぎ」が名詞化した焼畑地名で，「伐採形状地名」に属すると考察している（野本，1980）。白山麓のナギハタ・ナギいわゆる焼畑呼称については，野本氏の観点が適切妥当であり，高く評価すべきであろう。

2．「ムツシ」という呼称

すべての山林原野が，焼畑地として利用できるわけではない。例えば斜面が急傾斜であれば，一連の農作業は出来ないし，また尾根筋の山地は地力が劣るとして焼畑利用を避けている。すなわち焼畑に利用できる場所は，限られてくる。焼畑に適する山林原野を，「ムツシ」とよんでいる。「ムツシ」は，特異な響きをもった言葉でその語源はなんであろうか。

信頼性の高い民俗語彙辞典『綜合民俗語彙』第4巻（平凡社，1977）「ムツシ」の項目には，「石川県の白山を中心として，岐阜・福井と三県の山地では，焼畑耕作をムツシまたはヤマムツシという。……略……この地方にはムズスという動詞もあり，それは焼畑を荒しておくことであるらしく，……略……ムツシは普通15年から20年ほど荒しておくという。……略……」との説明がある。つまりムツシは，「ムズス」という動詞「焼畑を荒すこと」をその語源らしいと書いている。

若林喜三郎氏は，ムツシとは焼畑の用益地で，語源については「房し」が転じたものらしいとし，

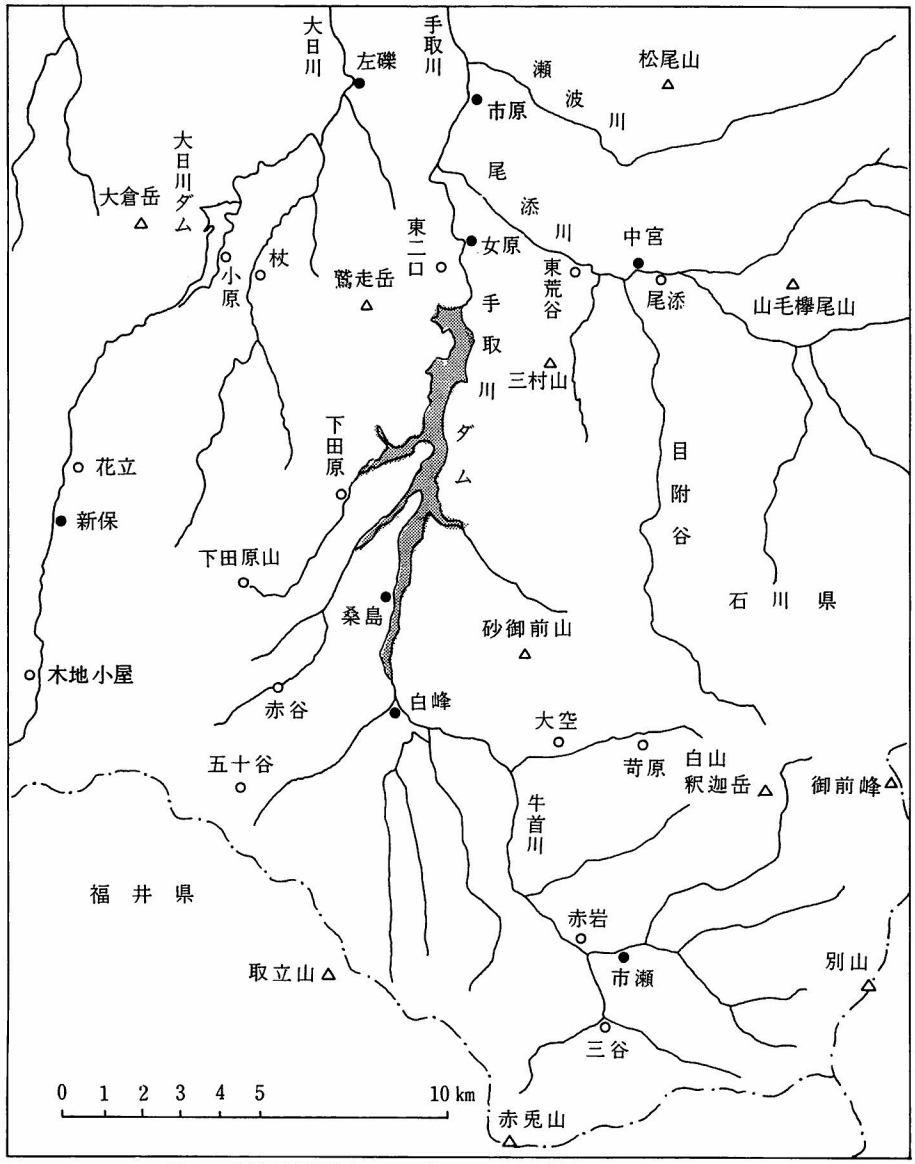


図1　調査地域概要　　○表1にのせた調査地　●主要村落

焼畑として用益した後，10数年ないし数10年放置した空間地をふくむ地域のことであると指摘している（若林，1962）。

ムツシの語源について，「ムヅス（綜合民俗語彙ではムズスと書いているが以下ムヅスに統一する。）」または「房す」でないかとする二つの説が浮かび，その意味する農業上の実態は，共通して焼畑地が地力が劣ってきたので，作りをやめて草木の生えるにまかせて放置しておくことだとしている。そこで，ムツシの語源とみなされる「ムヅス」「房す」という言葉が，現時点で白山麓に伝承されているかどうかを，調査地域を詳細に歩き聞き取りにはげんだが，確認できなかった。

しかし，「ムヅス」「房す」という動詞に代って，同意語として，白峰村河内谷苛原では「ナギを投ゲル」，白峰村大道谷堂の森では，「ナギを放ル」，大道谷苅安では「ナギをオク」，白峰村下田原，尾口村東二口，尾口村東荒谷，新丸村小原では「ナギを荒ラス」等の動詞があることがわかった。

東荒谷の小田孝太氏（明治44年生）によれば，焼畑を放棄することを「荒ラス」とも「捨テル」とも言い，荒ラスに関連して「木が荒レル」という慣用語をおそわった。「木が荒レル」とは，直接的に木が徐々に成長し大樹になることを指しているが，間接的には木が茂って大樹になった結果として，土が柔らかくなり肥えた状態をも指すのだという。この「荒ラス」という動詞の意味は，木が成長すると共に，木の生えている森の土が肥沃化することの両面の動きをあらわし，常識的基準でいう「荒ラス」とは本質的違いがあまりにも大きいと感じた。

常識的に「水田・畑を荒らす」と言った時は，例えば減反政策で稲作をやめた山の棚田は，雑木・草が生い繁り，農耕地として再利用できそうもない状態を頭に浮かべる。焼畑で言う「荒ラス」と，稲作・畑作でいう「荒らす」とは，木・草が生い繁る実態は同じであっても，その実態を支えている原理が全然異っていることに留意すべきであろう。

稲作は春に田植えをし，秋にはその稔りを収穫するという農事暦を，先祖伝来の固定した同じ水田で営んでいる。焼畑は毎年火入れし，新しい焼畑で施肥をせず数年間耕し，反面地力の劣った焼畑を毎年放棄していく。施肥をすることにより，同じ水田で稲作を永久的に営む水田稲作では，「荒らす」とは荒らした時期以降，耕作を永代にわたり放棄することを意味していよう。施肥をまったくせず，養分のある数年間を作る焼畑雑穀作では「荒ラス」とは，荒らした時期以降腐葉土を森の中で徐々に作って表土に養分を蓄え，再度の焼畑地になることを気長に待つことを意味している。

このような観点で，草木の成長すなわち自然の営みを通して地力の回復を待つ焼畑では，ムツシを『綜合民俗語彙』で「焼畑を荒らしておくこと」との説明より，若林氏の「用益した後の放置した空間地……」との説明が適切である。さらに「放置した空間地」より，地理学的視点で「休閑している土地」と表現しているのが，より適切な説明で的を射ていると思われる。

『綜合民俗語彙』でいうムツシとは，「ムヅス」という動詞の連用形「ムツシ」が名詞に変化したとする原則を利用すれば，白山麓に現実に存在する「投ゲル」，「放ル」，「オク」，「荒ラス」等の動詞の連用形から変化した名詞が存在しても良いことになる。この仮説的原則は，四つの動詞中「荒ラス」に該当し，この該当は尾添川水系の尾口村尾添と東荒谷の二村落に発見できた。具体的には，尾添・鶴尾伝兵衛氏（明治31年生）によれば尾添では焼畑を放棄休閑する動詞は「荒ラス」，休閑中の焼畑用地の名詞は「ムツシ」とよばず「荒ラシ」とよぶという。東荒谷・小田孝太氏によれば，東荒谷では動詞は「捨てる」か「荒ラス」，名詞は「アラシ」と「ムツシ」を併用するという。さらに，河内村内尾・内藤長松氏（大正4年生）により，手取川支流直海谷源流の焼畑では，尾添と同じく焼畑休閑の動詞は「荒ラス」，名詞は「荒ラシ」という言葉を慣用してきたことも分った。要約すれば，「荒ラシ」と「荒ラス」の組合せは現実に存在するが，「ムツシ」と「ムツシ」の語源と考えられる「ムツス」という動詞の組合せは，発見できなかったのである。

焼畑用地をあらわす呼称として，ムツシの他に「アラシ」という呼称があることが分った。ムツシ・アラシの両方の呼称を，『白峰村史』下巻（1959）『尾口村史』第1巻（1979）の近世文書で調べると，圧倒的にムツシが多い。そして地域性もはっきりしている。ムツシは，牛首川本流域，具体的には焼畑核心地域ともいうべき白峰村に断然多く，ごく稀にアラシがあった。具体的には旧桑島・聖覚寺文書「文化8年桑阿らし売渡證文」である。アラシは，尾添川水系ではムツシより数多く，具体的例では尾口村尾添・山崎正夫家文書「享保17年尾添村村民あらし売渡証文」，瀬戸・中出哲司家文書「宝永7年女原村百姓家来あらし盗苅詫証文」等である。文書ではムツシが牛首川本流筋に，アラシが尾添川水系に多く使用されている事実は，聞き取り調査で把握した実態と同じ傾向である。関連して尾口村東二口の文書には，ムツシ・アラシの二つが混在するがムツシが優勢である。ちなみに東二口における聞き取りでは，焼畑用地はムツシを言っている。高沢裕一氏によればムツシ・アラシの文書初見は，ムツシが古く天正10年（1582）であり，アラシは宝暦7年（1757）である（高沢，1981）。

以上の考察から，焼畑休閑地の名詞ムツシは，「ムツス」という動詞が語源でないかと仮設的に考え，慣用語の聞き取りや文書用語の検証を行ったがまったく発見できなかった。『綜合民俗語彙』担当者の調査時には，「ムヅス」という動詞はあったらしいが，現在は消失したのでないかと推察する。しかし白山麓には，「帳台（チョウダイ）」，「垣内（キーチ）」，「飯（イイ）を炊（カシ）く」等の古語が連綿と続いているので，「ムツス」という動詞が短期間に，しかも簡単に消失したとは考えられず，「かつて存在したのか」の疑問も生じてくる。

3．ムツシの意味

『日本綜合民俗語彙』のムツシの項には，「石川県の白山を中心として，岐阜・福井と三県の山地では，焼畑耕作をムツシまたはヤマムツシという。……」と記載している。『日本国語大辞典』（小学館，1976）のムツシの項には，「北陸地方で焼畑耕作のこと」と書いている。この二つの文献の記載は，完全な誤りではないが，「正しいのか，誤りなのか」の二者選一という立場では誤りである。

以下，なぜ誤りなのかについて説明する。文化庁は，各県毎に民俗文化財の緊急調査を指導し，結果を県別の民俗分布図に表現し，刊行している。白山麓は石川・福井・岐阜県にまたがり，民俗分布図は石川（1980）・岐阜県（1980）は刊行されたが，福井県は未刊である。石川県は73項目151村落を，岐阜県は63項目112村落を，地元研究者が調査し，項目別にその分布図を作成している。両県共に項目中に「焼畑の名称」をたてているので，白山麓の石川県側・岐阜県側で，焼畑を「ムツシ」または「ヤマムツシ」と言っているのかどうかを検証できる。

民俗分布図では，石川県側の白峰村・尾口村・吉野谷村・鳥越村では焼畑を「ナギハタ」または「ナギ」，岐阜県側の白川村・荘川村では「ナギ」が優勢である。民俗分布図で未刊の福井県側は，筆者の調査では九頭竜川支流滝波川上流の勝山市小原，打波川上流の大野市上小池・嵐では「ナギハタ」「ナギ」と言っていることが確認できた。権威度や利用度の高い二つの文献が，こと白山麓のムツシに関して，「ムツシとは焼畑耕作のこと」と指摘している事実について，岐阜・石川両県の民俗分布図と福井県側の打波川・滝波川水系の聞き取り資料を裏付けとし，誤りであることを指摘しておきたい（表1参照）。

白山麓の焼畑について精力的に取組まれた先学者は，ムツシについてどのように把握されていたのであろうか。幸田清喜氏の二つの論文（1952,1956）を総合すると，ムツシとは「一旦ナギ畑を作りて幾十年，及至数十年間放置せる土地の名称で，焼畑可能な茅原や雑木林である。」としている。佐々木高明・松山利夫両氏は『尾口村史』第2巻（1979）で，ムツシとは「焼畑のために伐採・利用したのち適当な休閑をおけば，森林が回復して，再び焼畑に利用できるような土地。あるいはもう少し限定的には，現に焼畑に利用しているか，または間もなく利用できる林地。」であるとしている。

表1　白山麓の焼畑関連語彙一覧

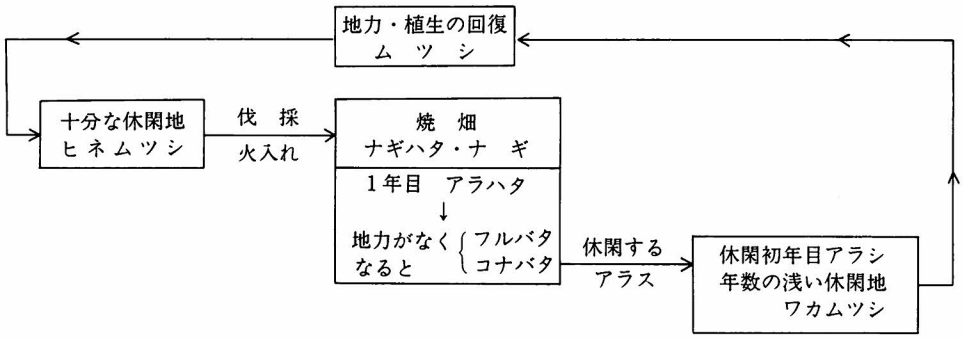
水系	村落	伝承者 生年	焼畑不適地	焼畑適地	焼畑	常畑
牛首川（東谷）	白峰村 赤岩	加藤　勇京 明治29年	サンカ	ムツシ	ナギハタ ナギ	キャーチ
	三谷	加藤　正信 明治44年	キリ	ムツシ	ナギハタ ナキ	キャーチ
	河内谷苛原	長坂吉之助 明治28年	サンリン	ムツシ	ナギハタ ナギ	キャーチ
	河内谷大空	愛岩　富士 明治39年	ダケヤマ	ムツシ	ナギハタ ナギ	キャーチ
	大道谷 五十谷	尾田　清正 昭和6年	ダケ	ムツシ	ナギハタ ナギ	キャーチ
	赤谷	久司久四郎 明治39年	サンカ	ムツシ	ナギハタ ナギ	ジャーラジ
	下田原山	山口清太郎 明治36年	サンカ	ムツシ	ナギハタ ナギ	ダイラバタ
	下田原	兵井　庭一 明治43年	ダケヤマ	アラシ ムツシ	ナギハタ ナギ	ジャーラジ
	尾口村 東二口	山内　行雄 昭和5年	アラヤマ	ムツシ	ナギハタ ナギ	メグラバタ センザイバタ
大日川（西谷）	旧新丸村 木地小屋	道見　鎌助 明治38年	サンリン	ムツシ	ナギハタ ナギ	キャーチバタ
	花立	橋爪　忠一 明治32年	サンパク フカヤマ	ムツシ	ナギハタ ナギ	ハタ
	小原	伊藤常次郎 大正11年	アラヤマ	ムツシ	ナギハタ ナギ	ハタケ ギャーチ
	杖	仲間　菊能 明治44年	アラヤマ	ムツシ	ナギハタ ナギ	ムシバタ
尾添川	尾口村 東荒谷	小田　孝太 明治44年	サンリン	アラシ ムツシ	ナギハタ ナギ	ザイショバタ センザイバタ
	尾添	鶴尾伝兵衛 明治31年	——	アラシ	ナギハタ ナギ	ムシバタ(ケ)

筆者自身の多くの焼畑体験者よりの聞き取り調査では，ムツシの実態は，一言で表現すれば，焼畑休閑地そのものである。旧新丸村杖（現小松市津江，廃村）には，「木ムツシ」，「草ムツシ」と言う言葉があった。木ムツシとは焼畑可能な樹林地を指し，草ムツシとは焼畑可能な草地を指している。すなわち焼畑は，適当な休閑期間に植生が回復し，腐葉土ができ焼畑利用可能地に復元するわけであるが，ムツシは植生的に樹木ばかりの樹林地と，草類が多く樹木が殆ど生えない草地の二種類に大別できる。同じような基準で，白峰村下田原では，「ハシケムツシ」，「草ムツシ」に分けている。ハシケとは，秋に紅葉が美しい落葉樹の総称である。

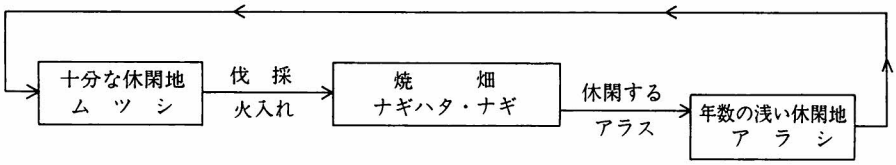
休閑期間に植生が回復繁茂し，地力が肥沃さを増した後，ムツシの草木を伐採することを「ナギ刈り」，火入れすることを「ナギ焼き」という。補足すれば，斧・鎌を入れる前の樹林や草地を「ムツシ」，斧・鎌がはいり鍬が使われる時点で「ナギ」と使い分けている。ナギハタは，火入れ初年目を「アラハタ」と言い，地力が減退しはじめた畑地を「フルバタ」という。フルバタは，畑地の肥沃度により

表2　ムツシ・ナギハタの循環模式表とムツシの種類

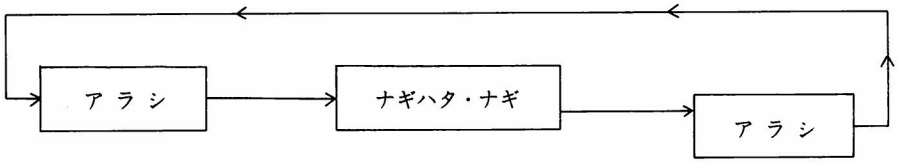
イ．牛首川水系白峰村下田原の循環（兵井庭一氏による）



ロのa．尾添川水系尾口村東荒谷の循環（小田孝太氏による）



ロのb．尾添川水系尾口村尾添の循環



ハ．ムツシの種類

休閑年数の差		植生の差		
ムツシ	ワカムツシ	ムツシ	キムツシ	(ハシケムツシ)
	ヒネムツシ		クサムツシ	(クサムツシ)

3年目以後の時もあれば，4年目・5年目以降を指す時もある。標準的には1年目稗・2年目粟・3年目大豆・4年目小豆であるが，3年目に稗を作った時や，4年目に粟を作った時は，3年目の稗4年目の粟は，休閑までに稗・粟共に2回作ることになる。このように，休閑までに同一作物を2回作る場合，その2回目の畑地を「コナバタ」とも「クナバタ」とも言う。関連して2回目の作物を「コナ稗」「コナ粟」と言う。東二口では，休閑直前厳密には休閑年1年前の畑地に限って「ムシバタ」と言うが，稀な事例である。

ナギハタ・ナギは，施肥をしないから地力が衰えると休閑する。休閑することを「投ゲル」「放ル」「荒ラス」等とよぶことは前に述べた。この休閑地を，牛首川本流筋では「ムツシ」と言い，二次的な樹林・草原に循元するのを待つが，休閑年数が少なく草木の繁り方が十分でない状態を「若ムツシ」と言う。対するに二次的植生が，十分な休閑期間を経過したので，極相状態になり焼畑用地としていつでも利用できる状態を「ヒネムツシ」と言う。尾添川水系の東荒谷では，畑地を休閑することを「荒ラス」，休閑後約10年間位の植生状態，すなわち牛首川本流筋でいう「若ムツシ」を，「アラシ」と言う。また東荒谷ではこのアラシを大根を作る夏焼き型の焼畑「ナナギ」の場にあてていたという。そして東荒谷では，牛首川本流筋の「ヒネムツシ」に相当するものを，「ムツシ」と言って両者を区別し，

休閑にはいることを「アラシにする」と言っていたという。休閑初年目を「アラシ」と言う焼畑慣行は，白山麓の福井県側の打波川源流の大野市上小池にも見出され，氷見繁雄氏（1984）が報告している。

加賀市伊藤常次郎氏グループの一連の焼畑作業を，昭和52年以来見聞して気がついたことであるが，ナギハタの良悪すなわち肥えているか瘠せているかを判断する際，「今年のナギは肥えている。」とも，「今年のムツシは肥えている。」とも表現している。ムツシとは一般的に，ナギ苅り以前の休閑地を指し，草木が苅られ，焼かれた後はナギハタになるわけである。しかし現実には，アラハタに稗が発芽した状態でも「このムツシは良い。」等と言うのである。この場合のムツシは，作物を栽培している畑のベースとしての山地・地面を指している。補足すれば，伊藤常次郎氏グループではナギハタとは，畑の土地と作物がユニット化した状態を言い，ムツシとは作物を作っている土地そのものを指すのである。したがって調査者の中には，焼畑イコール・ムツシと即断する者ができるわけである。

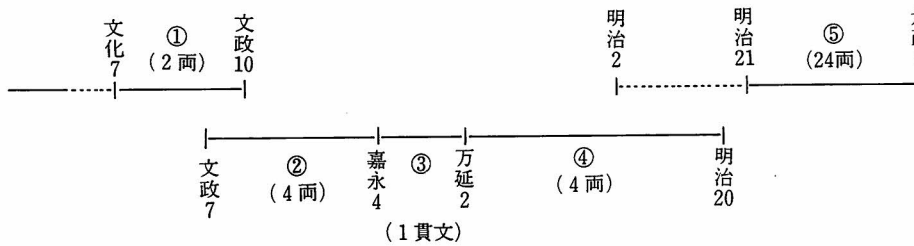
以上の考察にたって，最終的にムツシをまとめてみれば，簡潔な表現では「焼畑適地または焼畑用地」である。さらにムツシを概念規定的表現をすれば「狭義には，焼畑のために利用した後休閑し，植生・地力が回復途中にある，または回復終了した樹林地・草地を指し」，「広義には，狭義の休閑中の樹林地・草地に加えて，現に耕作している焼畑の畑地を指す。」となる。

ムツシを理解するために

1．焼畑の輪作体系と休閑年数

石川県立図書館は昭和53年（1977），石川県白峰村桑島の区有文書及び諸家文書の目録を刊行した。区有文書は村人に共有地内のムツシを請作させる際，耕作者・年季・地代等を詳細に記録している。解題的説明文に次のような記載がある。「一般にむつし耕作は焼畑耕作として説明され，その経営形態は輪作形式と休耕期間とによって説明されるが，下表の例をもってみた場合，全く休耕地を置かない耕作形態による定期的経営が行われていたことが知れる。……①～⑤が請作期であり，①・②の重複請作は先約的契約によって生じたものであり，④・⑤についても同様に④の契約が明治20年にあるのに対し，明治21年よりの契約を行っている例である。又，③は②の年季に対する延期期間であり，このように請作者は契約延期，先約契約等の手段をもって請作地の確保を行っている。このような形態をもって共有地の一作売地は特定個人の請作による固定化が一般化し，この請作地請人の固定化はむつしの定畑化を進めていく大きな要因となったのではなかろうか。」（下線は筆者，転写の表3参照）

表3　白峰村桑島雁山ムツシ請作表
（『白山麓島村諸家文書目録』より転写）



桑島区有文書「一作売渡帳」2・4より作成

記載内容を要約すれば，「共有地は請作者が，連続して契約請作をするため休閑期間がなくなり，その結果ムツシが常畑化するのでないか。」との説明である。請作者の連続化が何回も行われても，絶対にムツシは常畑化することはなく，先の指摘は間違いである。なぜ誤解が発生したか言うと，焼畑の基本概念としての「輪作体系と休閑」についての誤解があるので，そこから引きだされた結論も結果として誤解に連なるのである。以下，焼畑の「輪作体系と休閑」について，県立図書館がよりどころとした「向山雁山ムツシ（以下雁山ムツシと表記）」で説明する。

雁山ムツシの年季は18年・25年・25年・30年で平均すれば25年である。年季25年という数字は，単純には焼畑で主食の稗を栽培できる年が25年であることを意味する。白峰村の標準的な焼畑は，火入れ初年目は稗，２年目粟，３年目大豆，４年目小豆，５年目以降休閑である。ここで注意すべき点は，休閑は５年目だけではなく，５年目以降長期間にわたって休閑を続けるのである。表４・５の模式図で，白峰村の標準的焼畑を説明すれば，ムツシ１年目は25分の１の①区画のムツシを焼き稗を，２年

表４　白山麓の焼畑の標準的輪作体系図

年次／区画	1	2	3	4	5	6	7	～
①	稗	粟	大豆	小豆	休閑 1年目	休	閑	→
②	休閑 →	稗	粟	大豆	小豆	休閑 1年目	休閑	→
③	休	閑 →	稗	粟	大豆	小豆	休閑 1年目	→
④	休	閑 →		稗	粟	大豆	小豆	
⑤		休	閑 →		稗	粟	大豆	
⋮								

表５　雁山ムツシ５年目の土地利用

①休閑	⑥休閑	⑪休閑	⑯休閑	㉑休閑
②小豆	⑦休閑	⑫休閑	⑰休閑	㉒休閑
③大豆	⑧休閑	⑬休閑	⑱休閑	㉓休閑
④粟	⑨休閑	⑭休閑	⑲休閑	㉔休閑
⑤稗	⑩休閑	⑮休閑	⑳休閑	㉕休閑

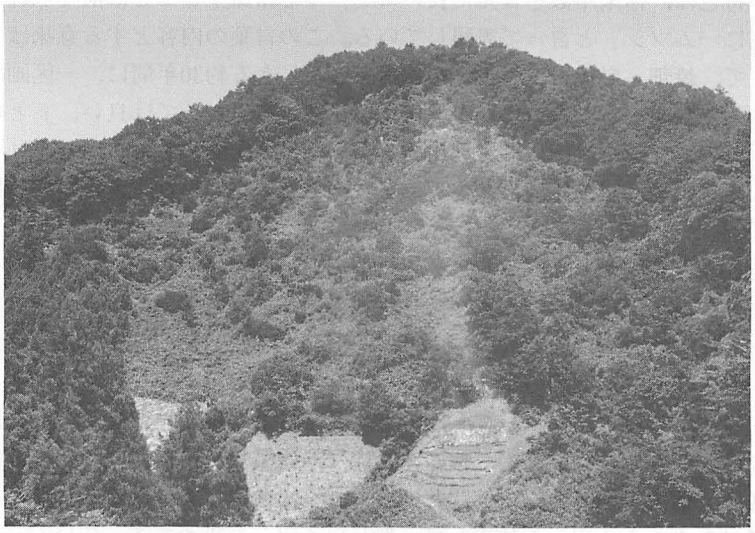


写真２　白峰村下田原山，セイシ山の「奥の山ムツシ」
煙の登っているのが，本年火入れのナナギ(大根作りの焼畑)，その左の三角形が火入れ２年目でアズキを作る．
このように毎年１反当て火入れし，数年作り，後休閑する方式で，ムツシを一巡する利用を「ムツシの一作」という．
焼畑に利用するムツシと，利用しないサンカの植生上の境は歴然としている．

目は②区画で稗，①区画は粟を作る。3年目は③区画が稗，②区画が粟，③区画は大豆を作る。このような作付けを続けると4年目には，稗・粟・大豆・小豆の四種の農作物が焼畑にあらわれてくる。この時点で雁山ムツシの景観は，模式的には25分の4が焼畑になっていて作物が植わっており，残り25分の21は休閑地として草木が生い繁った状態となるのである。5年目には①区画では休閑が始まり，焼畑跡地に植生の回復が起こりムツシへの還元が始まっていく。この方式を繰り返していけば，㉕区画のムツシを火入れし稗を作った時点で，①区画は休閑を始めて21年目に相当する。そして㉕区画で2年目の粟を作ると，再度①区画に戻って火入れをし稗を作るのである。つまり雁山ムツシを，毎年2・3反あて順次火入れし，その場所を焼畑で4年間耕作してから休閑しつつ，約25年間で雁山ムツシを一通り作ってしまうと，さらに最初に火入れした場所を再度焼畑に利用するというサイクルである。このような方式が，焼畑でいう輪作方式である。

輪作とは「性質の異なった作物を計画的に組み合わせ，一定の順序で循環的に同じ土地に作付けしてゆくこと（広辞苑）。」である。輪作の基本は，循環することである。焼畑の循環が成立するには，ムツシの植生・地力が回復するまで約20年以上の休閑年数を必要とする。雁山の模式例では，輪作の開始すなわち最初の循環が発生するのは火入れ26年目である。①区画に例をとれば，4年の作付年数と21年の休閑年数を経て，計25年の経過の後最初の輪作循環にはいるのである。繰り返せば，焼畑の輪作の特色は，循環年数は20～30年の長いスケールで実施されることである。

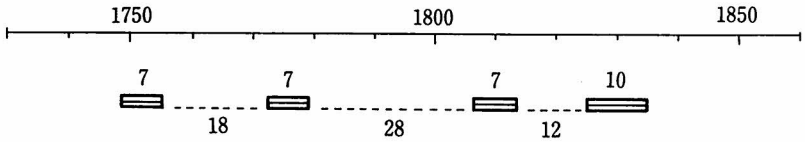
前置きが長くなったが，誤解が発生する第1の視点は，焼畑の作付年数を輪作循環年数と考える判断ミスである。焼畑が1年目稗，2年目粟，3年目大豆，4年目小豆，5年目休閑とすれば，5年を輪作循環年と考え，雁山を五区画のムツシに分け，4年間を農作物栽培，1年間を休閑すなわち計5年サイクルで循環的に作るという誤解である。このような誤った視点に立つと，雁山ムツシは請作者が連続請作を続けていくと，ムツシは常畑のように通年耕作化するという結論が導かれることになる。

焼畑の輪作の特色は，休閑年数を含んだ長いスケールで循環することは前で触れた。この事実を白峰村では「一生に一ムツシ」と言って表現している。この言葉の内容とする意味は「自分が一家の生業の中心となって，焼畑・炭焼き・養蚕・植林等をとりしきる約30年間に，一区画のムツシを一回使えば，焼畑の休閑年数すなわちおおまかな輪作循環年数の算出としては良い。」とのことである。焼畑民は，自己所有のムツシを焼畑に順次利用する際，細々と記録することはせず「一生に一ムツシ」の基準で，主人専業の約30年間に，同じムツシを2回使用しない原則で，焼畑の輪作経営をしていたのである。

一筆のムツシ面積が狭い時は，一通り作った後同一ムツシ内で焼畑を循環できない事例が発生する。具体的には『白山麓島村山口家・杉原家文書目録』（1976）記載の山口新十郎家所有のたきへらムツシである。たきへらムツシの年季は，7年が3回，10年が1回である。先にも触れたがこのムツシは，面積が狭いのが最大理由で短期間の請作しかできず，年季が7年となったものであろう。年季7年のたきへらムツシは，7年目に火入れし稗を作ると，8年目より輪作循環をしなければならなくなる。しかし7年目には，たきへらムツシの最初の休閑地は，休閑した後まだ間がなく3年目に相当する。8年目の休閑地は，植生・地力の回復は問題にならず輪作循環はまったくできない。(表6参照）したがって，請作者はたきへらムツシを放棄して，新しいムツシを求めて去っていく。一方たきへらムツシは，焼畑輪作ができるためには長期の約25年位の休閑期間を必要となる。そのためたきへらムツシでは，次請作者が契約するまで初回は18年，2回目は28年，3回目は12年間の間隔となっている。このように年季の短いムツシは，次請作人の契約までは，休閑年数とのからみで長びく必然性があった。

誤解が発生する第2の視点は，焼畑の休閑期間についての判断ミスである。請作地で旧請作人の年

表6　白峰村桑島赤谷たきひらムツシ請作表



山口新十郎家「土地一作請証文」より作成

季が終り，新請作人に貸与されるが，この新旧請作人の契約の間隔年数を焼畑の休閑年数・休閑期間とする誤解である。この誤解の上に立つと，同一ムツシで請作人が固定化し連続請作をすれば，休閑期間がなくなり焼畑が常畑化するという結論に達するのである。石川県立図書館『白山麓島村山口家・杉原家文書目録』（1976）の解題には「若むつしは，前の請作人より次の請作人までの期間の短いものをいう。」と指摘しているが，本筋では間違いである。前にも触れたが若ムツシとは，新旧請作者の間隔年数の短いものを意味するのではなく，焼畑は地力がなくなって休閑するが，その休閑年数が短く植生の回復が十分でないので，樹木が若い状態を意味する言葉である。若ムツシに対し，休閑年数がほど良くて植生が回復し，輪作が可能になった状態を「ヒネムツシ」と言うことも，前で触れた。請作地の若ムツシは，「ムツシ面積が非常に狭く，年季が数年で新旧請作人の間隔年数が短い。」という条件のもとで発生する。補足すれば，新旧請作人の間隔が短くても「ムツシ面積が広く，年季が20～30年。」という条件であれば，若ムツシにならないのである。「本筋では間違いである。」としたのは，第1に若ムツシについての視点が基本的に違っていること，第2に若ムツシ発生の条件として新旧請作人の間隔年数の短さをあげているが，これはムツシ面積が狭く，年季が短い時のみあてはまるからである。

2．ムツシと出作り

『白山麓島村山口家・杉原家文書目録』の解題で，「一作請証文の年季は，短いもので8年，長いものになると50年に及ぶものがある。4・5年を単位とする焼畑には考えられない年期である。」と記し，ムツシの50年年季を例に，年季が長いことに疑問を投げかけているような節が見える。年季が50年であれば，一か所に50年も落ちついて生業ができるわけである。50年年季のムツシは，単純には毎年火入れして新しく造成していく焼畑地が50ヶ所あるわけである。（実際には，20～30年の焼畑輪作の循環年数で，2世代にわたり焼畑を営んでいたと思われる。）言葉を置き換えれば，年季の長い請作地であれば，自己所有地並に永く安定して焼畑経営ができるので，その管理のための出作り小屋は居住性を良くするため，大型化し立派なものに発達していく。反対に年季の短い請作地では，数年しか焼畑ができないから，そこの管理のための小屋は仮小屋で構造が簡単で小型の小屋ですまさせる。つまり焼畑が広いムツシで経営される時は，持山・請山何れであっても出作り小屋が発達する。こうなるとムツシは，焼畑ばかりでなく，人間が居住する小屋場としての立地条件が加味されてくる。ムツシの良悪を論じる際，従来より『白峰村史』下巻（1959）記載の杉原亀十郎家文書「嘉永二年，杖村地内持分地見帳」が引用されてきた。これによるとムツシの良悪を構成する要素として「肥・不肥，薪の手寄，水の手，雪なだれ，小屋場の様子，桑のそだち，蚕飼のよしあしへの勘へ，はげみものの手寄等」をあげている。これらの要素の中，ムツシに直接関係する要素は，肥・不肥，桑のそだち（後で述べる）の二つだけで，他の要素はムツシを管理する小屋の立地条件に関係するものである。関連して，最後にあげている「はげみものの手寄」について，従来の研究ではどういう理由か無視され，言及されずにきた経緯があるので，この際紹介しておく。「はげみ」とは，余暇を有効に使って身をこなにして努力することである。具体的にはムツシ内に自生するゼンマイ・ワラビ等の山菜を採取して

写真3　白峰村赤谷の桑原

左奥の直立した樹木の多い所は雑木林．その手前の低木群が，ムツシに山桑を植林して作った桑原．

商品化すること，さらにオゥロ・イラクサを採取して糸・布を作ること，半植林の樹林より黄肌の皮・栃の実・栗の実を採取すること，さらにマイタケ・スギミミ等のきのこ類を採取すること等々の総括を，「はげみもの」と言う。したがってムツシの一つの要素として，今個々に紹介したような副次的な生業，収入すなわち「はげみもの」ができやすいような植生が好ましいとしている。この「はげみものの手寄」も，出作り小屋の要素であるがムツシの要素ではない。この小論ではムツシ中心で考えていきたいので，これ以上は掘り下げない。

3．山ムツシ・桑原ムツシのこと

近世のムツシ請作証文には，ムツシと共に「山ムツシ」，「桑原ムツシ（桑ムツシ）」の表記が目立つので，この際触れておく。

白山麓の焼畑民が，日常生活で「ヤマ」と言うのは，地理学や地形学で言ういわゆる山地とは，まったく異なっている。白峰村では，「出作り」と言う言葉をあまり使わず，「ヤマ」と言う場合が多い。これは季節出作りにおいて，春地下より出作りに初めてはいることを「ヤマ入り」，初冬地下に帰ることを「ジャーマ（出山）」と言うことと共通した慣行である。白峰村の人々は，村人が日常生活で焼畑・山樵・木炭焼き・養蚕等を営む山地領域を「ヤマ」とよんでいる。したがって春先，狩猟のため「ヤマ」より高度が遙かに高い奥山の山地領域へ出向くが，ここは「ヤマ」ではない。この奥山の山地領域は，各谷筋の出作り群では言い方が異り，大道谷五十谷では「ダケ（岳）」なのである。関連して自作永住出作りを，「三右衛門山」，「忠ノ山」等と出作りを営む家の屋号をつけて命名する。この場合の「三右衛門山」とは，三右衛門という峰（頂をもった山）の地名ではなく，「三右衛門家が代々焼畑や木炭焼き，植林等を行ってきた山地領域」という意味である。したがって白山麓で焼畑民が「ヤマ」と言うのは，広大な山地の中で焼畑を中心とした生業を営む限定された山地領域を意味している。だから，焼畑適地としてのムツシは当然「ヤマ」の領域中に存在する。

ヤマムツシとは，焼畑民のいう「ヤマ」の中のムツシということで，ムツシを丁寧に表現した時は，「ヤマムツシ」となるのであり，ムツシとヤマムツシは同意語である。

桑原ムツシに先だち「桑原」より説明する。桑原については，『金沢市立工業高等学校紀要』

（1980）の拙稿で詳しくまとめたので，それに準拠して要約する。桑原と書き「クワラ」とよぶ。桑原の桑は「ヤマグワ（以下山桑と表記）」と言う品種である。山桑は桑畑のように整然と密植し，剪定した「仕立て桑」ではなく，焼畑の山地斜面に植え剪定作業もあまり実施しない山育ちの「立ち通し桑」である。

山桑の苗は焼畑の火入れ年，稗の播種から発芽する間に，畑地に約6尺（約180センチ）間隔で植え付ける。養蚕を重視する出作りでは，火入れ初年目には毎年山桑を植え付けることを原則とした。地力の肥えたムツシであれば，焼畑4年目には山桑は1.5～2メートルにも達し，葉を摘み始めることができた。5年目以降，焼畑は休閑期間にはいって放置するが，山桑を植えた時は桑原打ち，桑原刈り，枯枝切り等の管理を続けていくと焼畑休閑地に山桑の植え付けが安定し，散在的にせよ山桑だけの植生地が育成される。これを「桑原」と言うのである。ムツシが瘠せている時，急傾斜で雪の滑落が激しい時，山桑は安定せず自然消滅の時も多い。したがって山桑を植え付けたすべての休閑地が，桑原に育成されるわけではない。地力の良い所，平坦地や緩傾斜地，養蚕場に近い所等，良い条件を満たす場所が桑原になる。したがって「桑原ムツシ」とは，ムツシの中の一部に桑原が存在している状態をさし，「桑ムツシ」とは「桑原ムツシ」の省略語と思われる。

4．アラヤマ・ダケヤマ・フカヤマのこと

ムツシが焼畑でどのように利用されているかに関して，特に「焼畑輪作と休閑」の原則について誤解されていることが多かったが，「アラヤマ」と言われている山地に関しても，適切に述べたものがなく，この際訂正の意味を含めて触れておきたい。

『石川県尾口村史』第1巻（1981）には，「広義の焼畑はまた山畑とも言われた。……むつし，あらし，あら山，むし畑が白山麓における山畑の主な種類であるが……」との指摘がある。つまり白山麓の山畑すなわち焼畑の種類にはムツシ，アラシ，アラ山，ムシ畑等があるとしている。端的にはアラ山は，焼畑の一つの種類であるとする意見である。さらに，別の調査者は『石川県尾口村史』第2巻（1979）において「あら山というのは，焼畑の休閑地の中で，炭山に伐採したあとですぐに焼畑に利用できない土地を指していることが多いようである。」と指摘している。つまりアラ山とは，休閑地で焼畑に利用できない場所らしいとの意見である。アラ山に関する二つの指摘は，一つは焼畑の一種，一つは焼畑に利用できない休閑地と位置付けているが，両者ともに誤解である。

結語的にはムツシとは焼畑適地，アラ山とは焼畑不適地を意味している。つまりムツシとは，広大な山地領域の中で焼畑用地として適切な場所であり，アラ山とは焼畑用地として不適切な山地の呼称である。アラ山についての詳細は，次年に調査報告の予定だが，模式的には山地領域の上部がアラ山，下部がムツシになるのが原則である。尾根・頂近くのアラ山は，水分や有機質の肥料分が斜面の下方へ脱流していくため，乾燥しかつ瘠せ急傾斜であり，また海抜高度も高いので風当り・気温・降雪量等で不利で，一般的に焼畑不適地なのである。アラ山を焼畑の一種とした指摘，アラ山を焼畑に利用できない休閑地とした指摘も，アラ山は最初から焼畑不適地だから，絶対休閑地にはなり得ないので，共に間違っている。

尾口村東二口や旧新丸村小原でいう「アラ山」を，白峰村大空の出作り群では「ダケ山（岳山）」，白峰村大道谷五十谷の出作り群では「ダケ（岳）」，白峰村苛原の出作り群では「サンリン（山林）」，旧新丸村花立では「フカ山（深山）」と言っている。（表1参照）

関連して，『石川県尾口村史』第1巻で，「ムシ畑」を焼畑の種類と位置付けされているが，これは誤解である。ムシ畑は，尾口村尾添の慣用語で，年輩の人は「ムシバタ」，若い人は「ムシバタケ」と言っている。尾添では，「ムシバタ」とは常畑いわゆる普通の畑を指す言葉である。常畑の呼称は，白山麓では村落や出作り群でかなり違いが目立つので，表1で示した。

この報告の終りに

最近の白山麓のムツシに関する研究調査は，白峰村桑島の諸家文書や区有文書，さらに尾口村史編纂時に公開された諸家文書等にもとづく，近世以降の貸借慣行に関するものが先がけとなった。並行して，尾口村史の第1次産業としての焼畑に関連して，ムツシを地理学的視点で考察したものもあった。これらの研究は，未開拓なムツシ研究に光をあて，焼畑農耕の全容を解明していく上で，大きな足跡と功績を残している。

大根，蕪の焼畑は続けられているが，本流的な雑穀栽培の焼畑は消滅してしまったので，危機感をもち焼畑体験者や継続者の意識に残る焼畑慣行について，民俗学的手法なかんづく聞き取り調査を続けている。その結果，聞き取り調査で知り得た焼畑慣行と，先で紹介した歴史学・地理学で調査した報告内容との間に，大きなへだたりがあることが分ってきた。したがってこの小論では，先学各位が報告された中の誤解点で，ムツシや焼畑の基本原則にかかわる問題について，多くの伝承者からの情報を総合して訂正の意味をこめて説明した。特にムツシを，焼畑そのものの呼称とする研究者が多いのには驚いている。この際，白山麓では焼畑を「ナギハタ」省略して「ナギ」と言うことを強調しておきたい。また焼畑の基本原則についての誤解から起こる，次の事象の説明論理の誤り，さらにその誤りから導かれる結論も間違った到達点に至る過程を，聞き取り資料にもとづき訂正するのに，多くの紙面を費やしたのは予想外であった。

民俗学は，伝承者の提供する情報を最重視する立場をとる。伝承者よりの焼畑慣行についての提供情報と，従来の活字化された内容との差が大きいので，今回は情報の出所としての伝承者をあきらかにしておくことは重要と考え，実名で列挙させていただいた。末尾ながら，これらの方々の御協力に対し，深甚の謝意をあらわしたい。なおこれらの方の中には，すでに故人となられた方もあり深く御冥福を祈るものである。

本論は，石川県白山自然保護センターの白山麓自然環境活用調査の内容一部を活用させていただいた。ここに厚くお礼を申しあげる次第である。

次回の報告では，焼畑適地ムツシと焼畑不適地アラ山とを対比しながら，どんなムツシが焼畑用地として良いのかの要素，すなわちムツシの立地条件の個々について検討する予定である。（続く）

文　献

石川県白山自然保護センター（1986）白山の出作り（執筆岩田憲二）．石川県白山自然保護センター．
石川県教育委員会（1980）石川県民俗分布図――緊急民俗文化財分布調査報告書――石川県教育委員会．
石川県図書館（1976）白山麓島村山口家杉原家文書目録．石川県立図書館．
――――――――（1978）白山麓島村諸家文書目録．石川県立図書館．
岐阜県教育委員会（1980）岐阜県民俗分布図――緊急民俗文化財分布調査報告書――岐阜県教育委員会．
氷見繁雄（1984）焼畑耕作と文化．奥越資料第13号，p. 75-88，大野市教育委員会．
幸田清喜（1952）白山麓白峰村．地域第1巻第1号．p. 42-50.
――――（1956）白峰の出作り．現代地理学講座第2巻，p. 270-289. 河出書房．
倉田一郎（1937）焼畑．『山村生活の研究』柳田国男編，p.154-159，民間伝承の会．
民俗学研究所（1977）改定綜合日本民俗語彙第4巻．p.1562，平凡社．
日本国語大辞典刊行会（1976）日本国語大辞典第19巻．p.84，少学館．
野本寛一（1980）焼畑系地名論．静岡県民俗学会誌第4号，p.18-36，静岡県民俗学会．
尾口村史編纂専門委員会（1979）石川県尾口村史第2巻．p.151-201，尾口村．

佐々木高明・松山利夫（1979）第１次産業．石川県尾口村史第２巻，p.201-216，尾口村．白峰村史編集委員会（1959）白峰村史下．白峰村．
高沢裕一（1981）白山麓の近世農業．石川県尾口村史第３巻，p.201-216，尾口村．
橘　礼吉（1980）白山麓の焼畑による商品作物栽培．金沢市立工業高等学校紀要第７号，p.1-26，金沢市立工業高等学校．
千葉徳爾（1984）ムツシとナギハタ.はくさん，第12巻第１号，p.5-7，石川県白山自然保護センター．
若林喜三郎（1962）出作りの発達．白峰村史編集委員会，白峰村史上，p.717-730,白峰村．
矢ケ崎孝雄（1983）白山麓白峰村における出作りの実態．石川地理創刊号，p.3-14，石川地理学会．
山口隆治（1984）加賀藩の焼畑について．石川郷土史学会会誌第17号，p.36-44，石川郷土史学会．
山口弥一郎（1944）『東北の焼畑慣行』（復刻版1972，世界文庫．）

Summary

The Mt. Hakusan-area has been known as a center of producing crops by "yakihata" (shifting-cullivation with slash and burning). However, it was not always possible for yakihata farmers to clear waste land at their desired locations. After the synthetic judgements about the vegetation, altitude, soil condition, grade and direction of land, they chose "the most suitable land for yakihata" ……what we call "Mutsushi".

It is said that the origin of the word "Mutsushi" comes from the verb "Mutsusu" which means fallowing land for yakihata, but the author is not sure of the existence of the verb "Mutsusu" yet. After several years' (normally 4 or 5 years) crop rolation by yakihata, the field was fallowed for about 20 years. It meant yakihata farmers needed at least 25 times the amount of land of the annual burning field. In conclusion, "Mutsushi" is the open land (woods and meadow) under or after recovering the vegetation and soil from exploitation by yakihata. In a broad sense, "Mutsushi" means the field under cultivation by yakihata also.

In the Hakusan area, yakihata is usually called "Nagihata" or "Nagi". Among former studies on yakihata, "Mutsushi" is occasionally regarded as yakihata itself. But, both are quite different from each other.